

第6期町田市民文学館運営協議会第4回議事録

- 開催日時 2023年12月12日(火) 18:00～20:00
- 開催場所 町田市民文学館 2階大会議室
- 出席委員 会長 渡邊正彦
委員 阿部哲也
委員 貝原俊明
委員 草刈大介(オンライン参加)
委員 中垣里子
委員 名取玲子
委員 熊谷玄
委員 若宮和男
- 欠席委員 副会長 長尾洋子
- 事務局出席職員
市民文学館担当課長 野澤茂樹
担当係長 笠原雄一
担当係長(学芸員) 神林由貴子
主任(学芸員) 山端穂
主任(学芸員) 谷口朋子
- 資料
資料1 文学館に関する主な事項について(6月21日～12月12日)
資料2 2024年度 町田市民文学館ことばらんど展示計画(案)
資料3 ことばや文学の魅力をいかにして伝えるか?
資料4 「街づくりと文学館」、「市民の活動・交流の場としての文学館」、
「ニューノーマル(アフターデジタル)時代の学校連携」、「アーカイブスとICTの活用」
参考資料1 遠藤周作展アンケート集計グラフ(12月10日現在)
参考資料2 遠藤周作展アンケート感想一覧(12月10日現在)

○ 次第

開会

議事

1 事務局からの報告

(1) 6月21日以降の文学館の出来事について

【事務局】資料1について説明

【議長】ここまでの内容について、質問・意見をお願いしたい。

【委員】質問。10月22日に文学館祭りがあり、3984人はすごい数字だなと思う。この日は4つのお祭りを同時におこなっていたと思うが、他のお祭りの入場者数とか来客数とかはどうだったのか。

【事務局】出ていると思うが、こちらでは把握していない。

【委員】皆さんに一個来れば全部回るという感じですかね。流鏝馬とか芹が谷へ来ていた人が結構こちらへ来ていたというイメージはあるのか。

【事務局】文学館の場合には、時代まつりで流鏝馬の時代行列というのがあり、甲冑を着て市内を行列するというのがあるのだが、その行列が通る道に文学館通りがなっていて、11時ごろにそれを見に来た方に「あっ、お祭りやっているな」とそこで知っていただき、帰りには寄って頂けた。また、芹が谷公園から帰ってくる道にもなっているので、その時ついでに寄っていただくことが多かったような気がする。

【委員】わかりました。ありがとうございます。

【議長】貝原委員、ショートショートは、どうでしたか。

【委員】コンクールには参加できなかったが、学校が変わったっていうこともあり、あまり推し進められなかった。申し訳なかった。まあ、前任の町田第二小学校の方が継続してやってくれたということでよかったなと思っている。来年度は規模を拡大して参加させたいと思う。

(2) 2024年度年間展示計画について

【事務局】資料2について説明

【議長】何か質問・意見はあるか。最近、サブカル系が少ないような気がするが。例えば、東京クロニクルとか今までの例で言えば。

【事務局】サブカル系でいうと、当館のテーマ展だと今回は落語をテーマにしたものになる。

【議長】落語がそれにあたるということか。お笑いですね。要するに落語とか古典落語とかがすぐ頭に浮かんでくるけど。そういう現代的なお笑いということをそういう路線でということですね

2 討議

- (1) ことば・文学の魅力をいかにして伝えるか？(図書貸出・会議室貸出)
- (2) 街づくりと文学館、市民の活動・交流の場としての文学館
ニューノーマル(アフターデジタル)時代の学校連携
アーカイブスと ICT の活用文

【事務局】資料3について説明

【議長】ことば、文学、そういったものの魅力を図書貸出、会議室貸出を通していかに伝えていくかということニューノーマル時代というような状況を念頭に置いたうえで、ここまでの内容について質問・意見をいただきたい。

【委員】利用者数が減っているのは、国政選挙もしくは地方選挙が少なかったからではないか。

【事務局】そういうことではなくて、本当に利用者数が減っていた。

【委員】そういうことなら相変わらず、実使用数が1番の課題ということか。実際に使用される、来場されることが1番のテーマなのか。根本的な話に戻るが、確か、2回目の時だったと思うが、文学館の存続にかかわる危機的な状況を解決するために何をすべきかということだったが、文学館の存続の概念は来館者数に左右されるということか。

【事務局】それだけではない。利用というか、それこそデジタルとか、その他にもYouTubeとかそういったことにも期待している。

【委員】そのトラフィックをカウントすることは来館者数が上がったという評価にならないのか。ここには実施の来場者、来館数だけのレポートになっている。

【事務局】今日の話は、やはり柱となる4つの事業ということで報告している。さきほど「57577展」とかコロナ以降、YouTubeとかSNSとか、そういったものの数は別にきちんととっている。

【委員】それはそれなりの試み、未来にかかわる評価に繋がるのか。

【事務局】数字がきちんと出てくるのでそうなると思う。ひとつのチャレンジ。まだそれが経常的な今の会議室貸出事業になっていなくて、スポット的な展開でしかない。それぞれの視聴回数とかXのフォロワー数とかきちんととっている。ちなみにYouTubeで言うと2020年は文学館が町田市で公開したYouTubeチャンネルの中で1番、視聴数が多かった。2022年は2番目に多かった。市の各セッションがYouTubeを作っているが、文学館の視聴回数が非常に多いとは言ってもらっている。それからXやSNSのフォロワーについては、現状は版画美術館に続いて2番。図書館や町田市の他のSNSアカウントよりも文学館にというような状況にはなっている。では、町田市としては継続して事業として評価しているかということころでは、なかなかパスポート的なものというような、継続した評価にはなっていないかなということころ。チャレ

ンジの1つというところ。

【議長】要するに言葉や文学の魅力を伝えるために、会議室がどういう風に有効利用できるかということですね。

【事務局】やはり、文学館に足を運んでもらう1番大きいコンテンツは展覧会、その次が教育的イベント。なかなかその会議室を利用して、文学、言葉に触れてもらうというような直接的なものというよりは、それを補完するような形のものが今日、紹介した事業である。

【委員】文学館の利用というのは、今日初めて知ったが、ここが公民館であったという歴史的な背景があると思う。利用者数が例えば前年比、コロナ前より減少したということは、それはアナウンスメントすれば具体的にここが利用できるという、しかも昔は、何とかの会とかいうクローズされた人たちしかやれなかったということからすると、それをすればいいと思うけど。そうではなくて、根本的にここを利用するっていう概念をもう少しスポットとか決めつけてしまうのではなくて、ここが発信する、ことばらんどとして発信することについて、何かの事業が恒久的に行われることを提案した方が、市としても、市長としても、教育委員会としても、その大きさを感じてもらえるのではないかと思う。だから、マンダラチャートだって、その真ん中に何があるべきなのか、もう1度、根本に戻って。ここの存続を未来に、どれくらい強く残していくかが、真ん中にあるって、そのためにはいろんな事業があって、それが使いやすくなるとか、インタラクティブに参加型の何か企画をすることか、展示会だけで来てもらうことだけがここを利用するっていうインタラクティブではないとずっと思っている。話がいつも基本的なところに戻ってしまうが、いつも報告で、来館者数がどれくらいであるとか、イベントのどれくらいの期間でどれくらいの来館者数であったとかに注意しているので。そのためにいるのであれば、自分は、実際クリエイティブなことをやっている人間としては、あまり力を発揮できないと思っている。

【議長】中垣委員は、どうですか。世田谷文学館ではそういう会議室とかもっているのか。どんなことをやっているのか。

【委員】基本的には、ここと一緒に、区内のいわゆる文学サロン。世田谷を拠点に文学的活動に限定し、ご利用いただいている。

【議長】利用状況はどうですか。

【委員】結構、競争率が高い。でも、利用者数としては町田と同じくらい。部屋は1つしかない。毎月1日10時に電話で予約となっている。高齢者のサークルが多い。

【議長】コロナの前と後で変化はあったのか。

【委員】ほぼない。一時期、貸出中止だった。貸出しのことで聞きたいのだが、蔵書に関しては、一般の図書館と同じようなラインナップなのか。選書として特色のある選書は可能か。

【事務局】可能です。オープンした時点ではゆかりの作家を中心とした選書構成

だった。ゆかりの作家を中心とした選書ではまったく借りられない状況。先ず、図書の扱いというか考え方を大きく変えたというのが1番最初。文学館、ことばの扉になるということがテーマになっているので、先ずはともあれ本に触ってもらい、手にとってもらいということを大事に考えていて、その中で、すぐ近くに中央図書館という大きな図書館があるため、図書館の差別化をどういう風に考えるかということ为先ず、考えて、その中で1番考えていることは、図書館は、紀伊国屋のような大きな本屋さんと同じと考えていて、文学館はその近くでやっているような小さな特色のある書店、いわゆる個人書店。特に言葉というものに特化したという形で、ちょっと特色を得た形の場所と位置付けて選書している。故に、大手出版社もちろんあるのだが、地方小出版とか、そういったものを意識的に集めるようにしたり、若い方に手にとってもらえるような物を意識的に集めるようにはしている。

【委員】構成としては差別化ということで、特色のある蔵書を置けることは強みではないか。今、割と特色のある本に若い子は触発されることが多いので、これは大きな軸になるのではないかなと思う。文学館に来て借りられるっていうだけでなく、例えば、他の図書館に予約して、それを借りられるとか、そういう連携とかはあるのか。

【事務局】ある。普通の図書館と同じだと思っていただいて、なので予約の受け渡しも出来るし、たぶん地域館というのだが、中央館ではなくてその分館が出来ることで文学館が出来ないことは何1つない。機能はある。機能はあるが、利用されないというのが現状。それは蔵書構成が先ず、ニーズに全く合っていなかったということがたぶんスタートなのだが、今はだんだんニーズの掘り起こしも含めて、実施をしてきたから、今はこういう状況なので、これを進めながらどうやったら文学館のいわゆるオリジナルの貸出ということが出来るかということこれから考えていく段階かなと思っている。これは、恒常的に出来ること。当館の場合は常設展示を持っていないので、展示をやる時はどうしても発生して3週間から4週間、その間は展覧会がない時間になってしまうので、そういった間を埋めるというか、図書貸出事業と会議室貸出事業とそういったところも役割として持っている。

【委員】興味深い話だったが、先ず図書貸出事業に関しては、個人貸出し冊数は11,452冊で、個人貸出人数が3,907人で、ということは具体的に1人、3冊借りているということですね。これ、すごく面白いと思っていて、どちらかという自分個人貸出人数を増やすよりは、1人が5冊借りるぐらいに伸ばした方が良く思う。つまり、たくさんの人に広く浅く借りてもらいより、1人の人に、文学館における図書貸出事業ってコミュニケーションだと思うので、そこを伸ばすようなことを考えた方がいいのかなと思う。具体的に言うと、例えばPOPをめっちゃくちゃこだわるとか、お勧めするとか、そういうことをすることでヘビーユーザー

を増やしていくような、それが逆に間口を広げる近道になりそうだなって話を聞いて思った。自分もコミュニティカフェを運営していて、ちょっと前にカフェの中で1か月だけ本屋をやるっていうのをやってみた。最初の1週間は、本を並べただけで、あまり売れなかった。始めてからしばらくたって、POPを書きまくって、それを付けたら、付けたものはちゃんと売れた。コミュニケーションとかその出会い方みたいなものってとても重要なのかなと、その時に感じて、この文学館の図書貸出事業って、図書館ではないっていうか、貸出人数を増やすよりは1人の数を増やす、借りる数を増やすっていう方を考えたほうがいいのかなと思ったのが1つ。貸し会議室事業についても、会議室が2部屋ですよ

ね。

【事務局】 7部屋である。

【委員】 7部屋あるのか。3,242件の利用件数で、何パーセント埋まっているのか。

【事務局】 午前、午後、夜間。

【委員】 1日、3ロットあるということか。

【事務局】 午前、午後の利用が多くて、夜間の利用はほとんどない。午前、午後については7割くらい埋まっている。夜間は2割。なので、全体として割合は下がってしまう。

【委員】 やはり、文学に関係するサークルとかそういう人たちが借りるとしたら、夜間って活動しづらいから、そういう人たちが借りないっていうことはありますね。

【事務局】 そういうことである。夜間、借りる人は若い人が多いが、なかなか文学で若い人っていうのは難しいので、年配の方が使うっていうところ。

【委員】 難しいボーダーラインがあるので、会議室需要ってめちゃくちゃ伸びていると思っていて、自分も、色んな所で色々な会議室を借りまくるのだが、コロナになってオンラインが当たり前になったのもあるし、そういう一般の人たちに貸出してしまうと、たぶん一瞬で埋まってしまうと思う。だから、そこに行かない方がいいのだろうなと思ったりすると本当に文学館のユーザーやファンの人たちが使いたいと思っていた人たちが借りられなくなってしまうようなニーズが、こちら側に結構、満タンで、これを取りに行こうと思ったら、それこそスペースとか貸会議室町田って調べて出てくる中に、リストとして挙がってきて、そこで予約できれば、結構、埋まると思う。それをやると、本当にたぶん、自分みたいにちょっと会議やりたいとかいうような人たちで使われてしまうから、どっちがいいのかなとすごく思った。7割稼動していたら、十分ではないかというスタンスでやるのがいいのかなというのもちょっと思ったりした。コロナの影響を受けて、当たり前だと思うが、コロナが終われば、また戻ってくるのも必然だと思うので、ここをあまり気にする必要はないのかなと自分は思う。今後、文学館の貸会議室が文学に特化し

た人たちに自由に使ってもらえる場として担保しておくのであれば、7割の稼働という設定はそんなに悪くないし、逆に夜間をやめるっていうのは1つの手だなと思っている。その分の経費を削減して、午前と午後だけにしてしまうっていう選択肢だってなくはないかな。週末だけしか夜間は貸さないとか。仕組みはちょっとわからないが、でもどっちに立つかだと思う。貸会議室の稼働を上げたいのであれば、上げる方法はいくらかでもあると思う。

【事務局】現状としては、もう少し稼働を上げたいと考えている。文学サークルは優先的に抽選申込が出来るので、それ以外はその後と2段階にわかれて、文学サークルだけではとても7割は埋まらない状況で、その中でなるべく稼働は増やしていきたい。

【委員】公共施設共通でやっているシステムから離脱して、民間と戦うというか民間のシステムに入っていくというのは1つの方法としてあるのかなって思う。

【委員】会議室って、利用できる人の条件ってどうなっているのか。

【事務局】先ず、サークルは5名以上の団体で、町田市在住、在勤、在学で18歳以上の方が代表というのが条件。個人も、町田市在住、在勤、在学で18歳以上の個人の方。

【委員】利用料金ってどれくらいなのか。

【事務局】安いもの200円、1番高いものでも5,000円くらい。

【委員】うちから見たら、安い。こんな値段で借りられるなんて。

【委員】展示の年間計画とかも、そうなのだがターゲットをどこにチャレンジするかによって全く違うと思うのだが、若い層がもっと増えて欲しいということだとすると、図書館という本と連動したようなイベントみたいな貸出方法ありだと思う。例えば、どうせ空いているのであれば、ちゃんと企画を募集して、無償で貸し出すということをしてもいいのでは。市のものなので、いろいろ会計上、何かあったらあれなんだが、渋谷でフューズっていうイノベーション、そこってコアワークスペースがあって、通常は有料で月々3万円くらい、何か月に1回、こういうプロジェクトをやりたいですと言って、採択されると無料で使えますみたいな、そうすると若い、お金が払えないけど、面白い企画を持ってくると、そこに人が集まるので、じゃあ普通に借りる人が増えてきてみたいなことがあるので、例えば文学に何かしら絡む、若しくは図書館の連動でもいいと思うが、大学も結構あると思うので、大学の人とかで、ここをイベントスペースとして使いたいみたいなのを募集して、一応審査もして、月のうち何回かやると、その人たちがオンラインとかで配信したりとかしたりすれば、文学館って借りられるんだ、イベントスペースで、っていうのが先ず、あると思う。若い層がそれで来るようになると、例えば切り口とかでも、大学生ぐらいから本当もっと下にも行けると思うのだが、以前も話したかも知れないが、文豪ストレイドッグスっ

というアニメカードがあるじゃないですか、うちの娘は文スト経由で小学生だけど、太宰など無茶苦茶読みまくっている。文ストの講座みたいななどをやって、文ストに出ているやつと、文ストは漫画や小説もあるので、並べて、そこに出てくる人とか能力の名前が、作品名だったり、作品に出てくる何かみたいな切り口もあるだろうし、桜美林とかあるのだったら、演劇とかも結構あれなんで、それをテーマにした演劇をやるとうるさいかも知れないが、それにもうちょっと余白のあるイベントに貸出すというのは、どうせ空いているのであれば、無料で、通常有料だけどやっていいですと言うと、この文学館側でその年代にミートした企画を自分たちが立てるには限界がある気がしていて、ここを活用して色々なイベントを持ち込んでもらって、その時図書館にあるものだったら、そこで読んでもらってもいいし、なんなら貸出もできます、みたいなことで、文学を切り口にイベントと蔵書がリンクするみたいなことが何らかに絡められるといいと思うし、その企画は若い人たちにやってもらった方がいいと思う。まあ、普通に月のうち何時間はってやって、学生じゃなくていいのなら、夜の時間ってイベントで借りたい人はいっぱいいるので、ただ会議ではなくても。会議スペースでやるとクローズでその人たちしか知らないけど、イベントをやっていたらそれを見に来る人たちにこの場所を借りられるんだっていう認知もとれるので、そこはその原価がかかっているわけではないので、特別枠で、無料で貸し出すっていうことをやっていいのではないかと思う。それが若い人たちが考えた色々なアイデアがたぶん出てきて、さきほど文ストもあったが、最近ではグッバイ宣言という、若い人、中高生に売れている曲があって、最近だとメディアミックスで歌を出します、その小説を出すんですよ、一緒に。この小説が、がんがんに売れているみたいな、歌の切り口でなんだけど、この歌詞の世界観を小説にして出すみたいのがあるので、文学の「のりしろ」って、今取り組んでいる漫画もそうだが、歌とかアニメとか、いっぱい切り口があるのを、皆さんと一緒に考えるよりは、そういうイベントが月1とか週1とかでも、ここで開催されるようになれば、そこから引き揚げてもいいと思うし、蔵書も貸出して、返しましたで終わるとちよっともったいないので、その感想とかも小中学校で出してもらったら、それが展示されますみたいな、それが会議室の中の展示でも別にいいのではないか。来たら、見られるとか、借りて本を読むという行為を見える化するところまで、ここでやると全然違う風になるのではないか。

【委員】 たしかに、YOASOBI もそうですね。小説ベースですよね。

【委員】 小説ベースは、むちゃくちゃ中高生、すごいんで。

【議長】 ここ最近1年くらいで大学生の文学に対する考え方は、はっきり変わって来ていると思っているところがある。例えば自分は文学の授業をやっているけれど人気がない。人気がない文学の授業でも取ってくる学生

ってというのは自分の理解や解釈を深めたいってそういう気持ちで取ってくる学生が多かったと思うのだが、ここ1年くらいで変わってきたのは、本の読み方を知りたいというんですよね。要するに本ってというのは、読めないことが当たり前で、その読み方を今、改めて知りたいんだっていう、そういう意味で本って、いわばアナログレコードが流行ったのと同じようにレトロな、ちょっと縁遠いものなんだけれど、だからこそ読み方も知りたいっていうような、そういう若い人たちが最近増えてきたんじゃないかって気がして。先ほど、POPをつけると本が売れていくと言っていたが、本っていうものの中身だとかそういうものを重要視するというよりは、イメージで本をカッコいいとか、カッコよくないとか、あるいはその本を読んでいる人はカッコいいとか、カッコよくないとか。そういう本っていうものをある種1つのイメージとして捉えようっていうような、そういう動きが今の大学生なんかにはっきり見えてきて、そういう意味では一歩進んだのかな、進んだのがいいのか悪いのかわからないが、やはりイメージ化が進んだっていうところは、はっきり思うところがある。アフターコロナっていうかニューノーマルの時代において、図書貸出となると色々考えるとイメージ化っていうのはすごく有益な方法だと思う。そのような観点から貸出っていう事業を活性化していくための1つのやり方みたいなものはヒントがあるかもしれないと皆さんの話を聞いて考えたが。いかがですか。何かおありになれば。
(特になし)

…休憩… (遠藤周作展見学)

【事務局】 会議室の貸出について、訂正。さきほど18歳以上という話をしたが、10月から高校生年齢相当以上に変更となった。

(3) 運営委員会からのご提案

【議長】 運営委員会の皆さんからご提案があるということだが。

【事務局】 メールで、3回でこの目指しているものというか、今考えていること、それから問題点を皆さんで共有できたと思っているので、委員の方から何かご提案があればお願いしたいとお願いしたのだが。

【議長】 フリートークっていうことですね。ご提案のある方は、挙手していただいてから進めたい。

【委員】 先ほども話したように、ターゲットをどこにするかによる、年齢的な構成もそうだし、町田の方に使ってもらいたいのか他から来て欲しいのかによって、戦略、やり方が違うと思うので、来年度の展示も決めた時それぞれ、全体を通じて、それは誰をターゲットにしているのかわかりづらいところもつたいない。提案としては、もし若い層がある程度、入れていきたいとか、文学そのものにすごく詳しい人、文芸、文学サークルを1番大事にしたいと思うのだが、その周りみたい

な人をどう、ここに巻き込んでいくかみたいなことが大事だと思う。さっきみたいに、イベントを打ってもらうとかもあるし、図書館で文学の良さを伝えていくとか繋いでいくためには、現代的な関心で古典をどう読むかっていう、再解釈みたいなものが必要。新しい目でどういう風にそれがゲレーションされるかという、図書館の図書スペースとかでも最近よくあるのが、人が個書店みたいな、渋谷だと渋谷〇〇書店っていうのがあって、偏愛で1棚持って、売主がキュレーションしてやるものがある。そのように町田の方で若い人が文スト推し箱を作ってもいいだろうし、それはオフィシャルに自分たちでやろうとすると文ストに許可を取らないといけないとかなるかも知れないけれど、ただ集めているだけであれば、市民がやる分には出来てしまうのではないかと思う。どういう切り口で、イケメン作家とか並べて、ともかく顔が好みとかでもいいかも知れないし、ここの企画にそういうものが巻き込まれていくみたいな、1棚何個か置いてやると、そこは自分がキュレーションしたので、見てっていう風に、周りの世代を呼び込めるようになると思う。そういうのもありだと思う。では、どういう人にここに入ってもらえばいいかを探していくためにも、何か文学に掛け算はあってもいいのだけど、もうちょっとゆるく、コミュニティ化していくかというか、ここで町田の方で文学にまつわる何かを仕掛けたい人っていうミートアップをやって、こういうイベントを開きたいって言ったら、そういう面白い人だったらいいだろうし、この人20代だけれども、いい切り口だから、棚主になってくれないみたいな話をしてもいいと思うし、ここの限られた中で企画していくって、しかも世代がここに参加している自分も含めて、もう1個世代が下になるのであれば、そういう人が巻き込まれたくなる場所を、会を先ずやった方がいいと思う。そうすると町田に在住の人、町田の大学に通っている人で、文学をもうちょっと、面白くとか、違う切り口でイベントを組む人が絶対いると思う。朗読劇とか、何が出てくるかはわからないけれど、クローズドに運営側が企画することではないことを興すのを、もうちょっと積極的に行った方がいいのではないかと思う。具体的に言うと、棚貸しみたいなものとか、文学館で何か仕掛けたい、もっと活用できないっていうのを考えてもらう、考えそうな人を集まるミートアップを開催するだけでも、だいぶ変わるのではないか、という提案です。

【議 長】 いかがでしょうか。今、委員の話をもつて、最近の若い人っていうのは、スタンダードっていうものを持っていないというか、例えば、これってみんな知っているよね、みたいなものを知っているわけではない。みんながそれぞれ違うスタンダードを持っていて、誰かがそれを知っていて当たり前だけれども、誰かは全然それは知らないみたいなことは平気で起こるっていうようなそういう傾向があるような時に、

色んな、先ほど言っていた貸し箱みたいなものを隣り合わせながら、隣の人の貸し箱に興味、関心を持たせるとか、今、やはり個人化して、もうベストテン番組みたいなものは、成り立たない時代だと思う。そういう中で個人のそういうそれぞれの特徴で、あなた何を興味持っているの、みたいなことを覗き見るみたいな、そういう形っていうのは若い人には結構受けるのではないかと思った。

いかがでしょうか、どんなことでも意見をお願いしたい。

- 【委員】 これまでのことと全然違う話かも知れないが、ずっと思っているところで1つ。例えば芹が谷公園から駅へ行こうとして、文学館通りを歩いて、文学館の前を歩いて、ここ文学館なんだって、いう風に認知する時間よりも通り過ぎる時間の方が先に来るっていうのは、もう少し、前の空間をうまく活用できないものなのか。ちょっと文学館自体の階段は前に出ているけれども、建物は後ろに下がっていて、ことばらんどって書いてはあるけれども、ことばらんどが何だか、いきなりことばらんどって言われても、わからないっていうことがあって、歩いていると出っ張っている階段のサインなど、色々展示とかついていたりするけれど、なんとなく、あの空間はすごくもったいないなという感じがある。もう少し何か、例えば中の本を持って読めるようなスペースが外にあるとか、何か人がいるような感じが作れるといいなっていうのと、文学館通りの、ここ文学館だっていう何かその感じをもうちょっと出せるといいなといつも思っていた。自分はランドスケープデザインをしているので。ちょっとあの引いたスペースは変えようがあるのではないかと考えている。お祭りの時にここで何かやっているとお祭り来たように、活動を滲み出しているような「軒先空間」が作れるといいなと思う。意識的にそういうところで、イベントや展示をやってみるとかがあってもいいと思う。

- 【議長】 若い人はイメージを大事にするので、やはりこういう若い人が惹きつけられるイメージをああいう所に出現させてあげることは、大きな意味を持つと思う。

- 【委員】 1回で気になって入ってくる人は少ないと思う。だけど、そこで何かやっている、その時は1度通り過ぎても、次来た時も何かやっているなって感じで、また通り過ぎて、3回目くらいで、今日は勇気出して入ってみようかな、で入る、そういう感じで広がっていくと思う。ネットとかで遠くにリーチするっていうやり方も大事だが、前を毎日歩いている人が中に入ってくるきっかけをどういう風に生み出すかっていうことも同時に考えていけるといいと思う。

- 【議長】 外のイメージもまだ変えようがあるのではということですね。

- 【委員】 今のでいうと、逆にことばらんどとして言葉って強くなって、毎回展示を見る時に、書き出しの言葉が書いてあるのが、すごく目を惹くし、すごくいいなと思っている。入口のところにでかい文字で15文字く

らの言葉が書いてあってとか、ポスターはビジュアルイメージが多いので、逆に言葉がドンと置いてあるみたいなのは、外に言葉が見える化されているとか。

【委員】よくお寺とかで教訓めいたありがたい言葉を墨で書いて貼ってあるところありますよね。ああいうように近いような言葉が、例えば遠藤さんの一文が貼られていると、確かに無茶苦茶面白い。

【委員】ビジュアルなポスターだと通り過ぎてしまう、ポスターってある意味、全部の情報が載っているのだから、それ以上を知る必要がない。リアクションだけ、疑問が湧かない。だけど、そういう抜き取られた言葉が1個来るとかだと、それを解明したくなる。

【議長】草刈委員はどうですか。

【委員】どのように人を呼ぶかっていうことが大きな課題だと思って議論の中で思った。自分自身は美術館のような施設だったり、子どもが遊ぶ施設の経営だったりをやっている立場なので、その立場から言うとどうやってお客さんを呼ぶかの前に、文学館って何なのかっていうことを再定義、構築した方がいいのではないかと思う。「ことばらんど」が依然使えるかだと思う。文学館っていう名前だとお客さんが来てくれないとか、そういうイメージを広げていくとか、ある種の方針として使えると思う。文学館って、やはりわからないんですよ。芸術が好きな人であれば、文学館ってわかるけれど、この中で何をもらえるものなのか、何を提供する場所なのか、それは展覧会なのか、あるいは図書館のような機能なのか、あるいは別のイベントなのか、そういったことを通じて何を提供していく場所なのかを再定義しないと、どういう手段で、どういうターゲットを設定していくのかっていうのがちょっとわからないなというのが素朴な印象。フォトスポットを作るか、動線を変えると、技術的にも色々あると思う。ただ、そのことによって、誰に寄与するのか、何を提供するのか、根っこの方にないと、そういった手法も効果があるのかないかわからない。自分も展覧会をやっているが、お客さんを呼ぶのは難しい。どんなにみんなが知っている展覧会をやっている、その前を通過して、知っているっていうだけで、入らないですね。それは、そこの中で何をもらえるか人はわからないと、どういう体験ができるかわからないと入らない。提供していくものが何なのかを一時の集客ではなくて、継続していくことをベースに定義し直した方が施策の効果だったり、パフォーマンスが上がってくると思う。当たり前の話で議論してきたところだと思うが、何回か打ち合わせに参加していて、1番やるべきことはそこだと思う。

【議長】何か意見はあるか。資料4があるかと思うが、資料4にいくつか書いてあるが、街づくりと文学館っていうようなことで、委員にお話を伺いたい。先ほど、外観の話が出たが、街づくりというようなレベルで考えるといかがなものでしょうか、文学館の改善していけるような点

とか、何かご意見ありますか。

【委員】 地元の自分たちのグループで街づくりを考えるときに図書館と文学館と、下の版画美術館と公園とそういった施設を回遊して街中を巡るとか、駅の近くのエリアの中で、町田市の財産としてあるエリアだと思っている。文学館もそうだし、芹ヶ谷公園もいい場所ではあるが、実際、地元の人間でもなかなか足を運びづらい。また、連携が全然足りないなと思う。もっと色んなところと近づいて歩み寄ると、もっと色んなことが出来るのではないか。この前、お祭り4つ同時開催して、そこを周遊する動きを他と作れないかっていうのはある。ただ普段、通りがかりではあっても、プラスアルファがあるとよいがそれが無い。話を聞いていて、当事者が考えるよりも、もっと考えるのにふさわしいグループとか人材とか学生さんだったりとか、自分たちの視点ではないものの見方をしている人たちを、手伝ってもらおうとか利用するとか、委ねるとか、そういうことを自分たちはもっと働きかけて知恵を借りるといふ動きをもっと進めていかなければ。

【委員】 ここに書いてあるパークミュージアムに関しては、公園の整備より先に美術館を作ろうっていう話だったが、たぶん今、美術館がコスト、施工費というか、建設費の高騰で3回連続、不調になっていて、公園も一応パークPFIでやろうっていう話になっていると思うのだが、たぶん、なかなか動けないっていう状況なのかなっていうのがあって、残念だなと思う。自分も2年くらい出番がなく、ずっと待っている感じ。それとは別に街づくりと文学館っていうことを考えた時に文学館を持っている街って、すごい少ないと思うと、すごい貴重だと思うし、文学館が文学館であるっていうことが、街の多様性を担保する大きな1つの武器になっていくのだろうと思う。それをしっかり守っていければいいと思う。その時に文学館をどう評価するのかって、先ほども話があったが、評価の仕方みたいなものを少ししっかり考える必要はあるだろう。例えば、入場者数とか数が多ければいいみたいな、そういう理論は果たして正しいのかとか、街の豊かさを測る指針みたいなものを文学館なりの目線で紡ぎだせるとすごくいいのではないか。それが何かはわからないが。文学館はこういうことを達成していればいいのではないかという話が出せることがすごく大事だと思う。先ほど、他の委員が言っていた何を指すのか話に通じるかも知れないが、それは街づくりとしてもすごい重要だと思う。もう賑わいを作るような街づくりではないでしょう。昔は街づくりというと賑わいを作りましょうとか、人を呼びましょうとかそういう話だったが、人口は減っていくし、それは絶対変えられない。その中で我々がどう生きていくのかっていう時に文学はどういう落差がもたらされるのかということをもう少し、本質的な指針を出せる指標みたいなものを作れると本当にいいのになと思う。それが本当に街づくりの重要なことだと思う。

【議長】 価値観が多様化しているこの現代においては、どのようなものが望まれるのかっていうのは、よくよく考えないといけないと思う。あと、資料4の中にはニューノーマル時代、アフターデジタル時代の学校連携っていう報告があがっているが、これはいかがでしょうか。

【委員】 ショートショートとか作文とか、物語づくりなど創造する力、書く力を身につけることが求められる時代であり、これは本当に必要な力。やってもらうことによって、子どもたちの発想を広げる点ではいいかなと思う。今、色んな話を聞いて、文学館って言った時に、初め全然ピンと来なかった、ことばらんどって、ここの学校に勤めて、何のことかなと思って、地域の会合がここで開かれたから、ことばらんどってこういう所なんだって知ったところだった。実際、教員としては、文学って聞いた時には教科書に出てくるような作家あたり、例えば、ごんぎつねとか宮沢賢治とか、そういうところを思い浮かべる。そういう教員だったら、そういう所へ来て、何かそういうのを調べてみたいなのか、もっと深い所、もちろん地元の記念館へ行けばいいのだろうが、そこまでに行くことは出来ないけれど、こういう所でそういう文学に、作家の神髄に触れるような所、「あっ、こういうバックボーンがあってこういう作品が作られているんだ」ってことがわかると、より子どもたちに指導しやすいのかなと思う。そういうものが得られる文学館だと、教員としてはありがたいかな。立地的なことに関しては、町田市に言いたいのだが、結局、博物館とかポンポンと分かれていて、上野だったら美術館とか博物館とか集まっていて、あそこへ行けば、ぐるっと周っていけるよなというのがあるが、町田市は、本当に田舎の方から都会の方まで、ポンポンポンってあるので、何かこれは繋がりにくいなって。

【議長】 さまざまなご意見ありがとうございました。いただいた意見をこれからの事業に活かしてもらえたらと思う。

3 その他

(1) 第5回運営協議会スケジュールの確認

【事務局】 次回は委員の予定が合う6月11日もしくは18日のどちらかの18時からの開催とする。